

患者の意思尊重した最期を

本吉病院 在宅医療シンポジウム

気仙沼市立本吉病院が26日、本吉公民館の在宅医療シンポジウムで開かれた。「本吉病



在宅医療について学んだシンポジウム

院が地域で目指す在宅医療と看取り、地域で、大切な人

をどう看取るのか」をテーマに高齢化社会の進展に伴う在宅医療について考え合った。

医療関係者や介護施設職員、行政職員のほか地域住民合わせて約100人が参加。在宅医療や訪問看護、在宅介護に関わっている担当者が講演し、ニーズが増している在宅医療について理解を深めるとともに、それぞれの役割を情報交換した。

在宅医療を専門に行っている東京都世田

谷区の桜新町アーバンクリニック・遠矢純一郎院長は、近年、人生

の最期を自宅で迎えた

いと願う人が増えていることについて、「病院で過ごすよりも自宅で療養する方が肉体的、精神的苦痛の緩和に役立つ」と指摘。

患者本人の意思を尊重した最期を迎えられる体制構築に向け、「介護、看護など患者を見守る関係者が密に情報交換することが重要。最期を看取る家族へのケアも忘れてはならない」と語った。

この後、津谷居宅支援事業所のケアマネー

ジャー吉田理恵さん、

本吉総合支所の鈴木由佳里保健師が「自宅で医療や介護サービスが受けられることで、その人らしく住み慣れた地域で過ごせる」などとメリットや目的に関

して講話した。

本吉病院の齋藤稔哲副院長は「お世話をす

る、される関係を作り、失われつつあるふれあいを大切にしたい」と語り、在宅医療を

通した人とのつながり

の大切さを支え、「生き生きとした本吉を守っていきたい」と病

院が目標としている方向性に理解を求めた。

この後、出席者がパ

ネルディスプレイで意見交換した。